

山林的人間

この八月末も一週間、北海道の山々を歩いた。日高・浦河の駅からタクシーで一時間、林道の終点で降りる。膝下ほどの深さの川を渡り、赤テープを頼りにクマザサの中を登ると、小さな峠に出た。熊よけの笛を長く吹き終わると、風の音しか聞こえない。ここには携帯電話も届かないし、もう一人だけなのだ。なにやらうれしくなり、シラカバの林をしばらく眺めていた。

ふたたびササの中を下ると、地図にある別の川にぶつかった。さらに林道を歩いて山越え約四時間、森の中に目指す無人小屋が見えてきた。

菅原伸郎

善財

南無

今夜は一人でゆっくりできそうだと期待しながら近づくと、どうも人の気配がする。悪い予感のなかでドアを開けると、ああ、十四、五人の男女が酒盛りの真っ最中……。

五十代から七十代までの気のいい人たちばかりで、発泡酒もご馳走になり、お世話にもなった。しかし、東京を出るときの「山奥で数日、だれにも会わないで過ごす」という目論見は見事にはずれてしまった。翌朝からはベテカリ岳などを目指したが、每晚十数人がいっしょで、寝付

かれない夜もあった。

俳人の永田耕衣さんに『山林的人間』（人文書院、一九七四年）という随想集がある。芭蕉や道元を挙げて『山林的人間の思索瞑想によらねば、このように、永遠に人間を根源的にゆすつて快い文学は生まれなかつたであろう』などと書いていた。

峠で休んでいたとき、私もこんなことを考えた。人間は社会的存在である、他者との共存によってこそ生きる、と学校などでは教えられてきた。しかし、実は、まず山林的人間なのではないか。独りで生まれ、独りで死に、独りで去り、独りで来るのだから。それが原点にあって、次に初めて社会的人間になる……。

その事実を知るためには何が必要

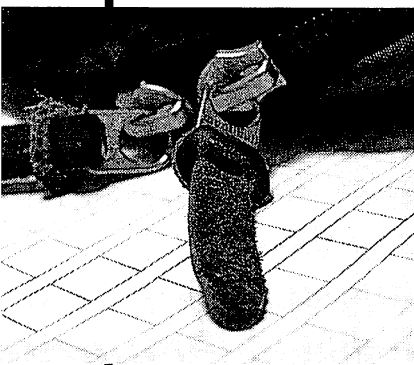
だろう。前号で触れたように、文部科学省は道徳教育で「畏敬の念」を教えている。しかし、そんなことよりもまず、静寂であり、沈黙であり、独りであることだろう。新約聖書の「マタイによる福音書」も、イエスの姿をこう伝えている。

《群衆を解散させてから、折るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた》(二四・二三)

この逸話を踏まえて、神学者P・ティリツヒは嘆く。

《今日、過去のどの時代にも増して、人がひとりであることは厳しく、そのゆえに「ひとりであること」の栄光を保つことができせん。そして群衆の一部になろうと必死に

もがきます。世界中のすべてのものがこれを助けます。教師、親、そして公共情報機関の経営者たちが、「ひとりであること」の栄光」のための外的条件、すなわちプライバシーを守る最も簡単な助けを私たちから奪いとるためにありとあらゆることをする、というのがこの時代の病いの一症候なのです》(茂洋訳「永遠の今」、新教出版社、一九八六年)



いままに何日も過ごしたそうだと。しかし、現代にあつては、それもうらやましく聞こえる。安くはない飛行機代やタクシー代を使って日高山中に出掛けても、それでも都会の雑踏が追いかけてくるのだから。

ここまで書き終わったとき、外からまた、大音声が聞こえてきた。東京都下のわが町では、半年ほど前から午後五時に市役所の拡声器が短い音楽を流すようになっていた。子どもたちに帰宅を促すためらしい。そんなことで少年非行が減ると思えないのだが、まさにティリツヒのいう「ひとりであること」の栄光」はかく奪われていくのである。

(すがわら・のおお)

東京医療保健大学教授